

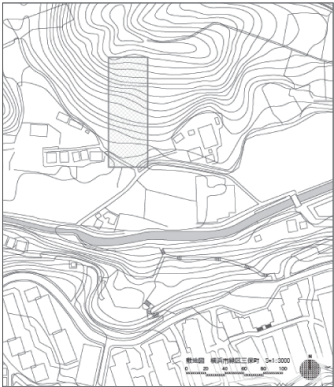
家のかけらは星屑となる



Kondo Tetsuro
近藤 哲朗
Nagano Kaede
長野 楓

家は砕け散った。
家のかけらは森に根付き、
森はからのハコを包む。
男はハコからソトを眺め、気づく。

これは、家と森とそこに住む男の物語。



男は今年で六十歳
いわゆる普通の住宅に住んでいた
スウィッチを押しは壊れがき
蛇口をひねれば水が出る
お風呂は自動で沸くし
冷蔵庫も洗濯機も
夏も冬も年中快適
今の世界ではありきりの生活
ほんとうにのまかいのたうか
男はそんな暮らしに慣れていた
もともと家が壊れていたのでないか
すべてを投げ出して
男は旅を始めることにした
そしてあるとき
不思議な土地に出会った
周囲を竹林に囲まれ、緑が
頭の水をぬれ、まきだした
足が埋まる程かかかの落葉
その上に散らばるたくさんの葉の光
竹の音が、風が、光
斜陽の光にまぎれ、小川
ひっそり
守られている場所
男はここに移動しようと思った
ここに移動しようと思った
男は自分の居場所をくると考えた
この土地を
自分の住まいにするために
それは
たまたま入口があるだけのシブアルハコ
男はこのハコに居ることに
この場所に住むんだ
という認識を強めた
スウィッチを押ししても壊れはつかず
お風呂は自分で沸かすわけではない
夏も冬も年中快適いから
というわけにはいかない
そんな暮らしが続き
男は旅を始めた
新たな旅を始めた
次男に男の生活は
散地を体で覚悟した
男は新しいことを行っていた
「記念に」ハコに小さな穴をつけた
ハコの中から場所がらう員を位置に
真暗なハコの中に入ると
小さな穴から差し込む光が
まを居るのまに見えた
穴を覗き込むと
そこには無限の世界が広が
ゆくりと時が刻まれている
ハコの外に広がる生活を
ハコの中から感じる
ハコの外と内をなく
ここにいらして
散地を体で覚悟した

